



様式第4号 (第7条関係)

令和8年2月27日

東かがわ市議会議長
工藤 正和 様

東かがわ市議会議員
(会派・個人・その他)
氏名 久米 潤子

行政視察等報告書

| | | | |
|---|---------|---|--------|
| 1 | 日時 | 2026年2月18日(水)～2月19日(木) | |
| 2 | 参加者 | 久米 潤子 | |
| 3 | 研修目的等 | 内 容 | 研修場所 |
| | | 【1日目】子育て支援総合施設「モックランド」について 【2日目】伝統産業「大川家具」の産業振興について | 福岡県大川市 |
| 4 | 研修・調査内容 | 別紙参照 【1日目】モックランド建設の経緯、政策目的、人員体制、利用状況、関係機関との連携、相談体制等について 【2日目】大川テラツツァ建設の経緯、事業費、運営体制、関係機関との連携、来場者数、ふるさと納税、今後の展望等について | |
| 5 | 研修成果 | 別紙参照 【1日目】・専門職の「顔が見える」連携の仕組みづくり ・ふるさと納税の戦略的活用とシビックプライド ・「相談」を「交流」の中に受け込ませる工夫 【2日目】・「稼ぐ」ためのコンシェルジュ機能の構築 ・スピード感を持った事業評価とプロモーション ・「教育×産業」による次世代シビックプライドの醸成 | |
| 6 | 費用 | 46,210円 | |

※領収書(交通費・宿泊費の明細が分かるもの)、研修資料を添付してください。

子育て支援総合施設「モッカランド」について

【研修・調査内容】

「大川市ならではの子育てが楽しくなる」という志を掲げ 2021 年 10 月に開館した、大川市子育て支援総合施設「モッカランド」を訪れた。旧市立病院跡地を活用し、整備計画策定委員会で「とにかく子どものために」と丁寧に議論を重ねて誕生したこの施設は、市内に点在していた子育て支援機能を集約した、まさに支援のワンストップ・センターである。

■ 専門職が「横」でつながる、縦横無尽の支援体制 驚くべきは、その職員体制の厚さである。施設長を子ども未来課長が務め、館内には児童発達支援員、作業療法士、社会福祉士、言語聴覚士、公認心理師、保健師、管理栄養士など、各分野のプロフェッショナルが揃う。特筆すべきは、これら多様な専門職が「横軸」の関係を保ちながらも、支援の現場では「縦軸」で強固に連携している点である。母子手帳の交付から、家庭・養育相談、さらには本格的な療育サポートまでが、一つの屋根の下で完結する「こども家庭センター」としての理想的な機能を有していた。

■ 市民の日常に溶け込む「居場所」の工夫 視察当日、親子でジャガイモ植えに励む微笑ましい光景に出会った。こうした行事を通じ、自然な形で相談や情報交換が行われている。また、施設内の「モッカフェ」は、社会福祉法人が自主運営を行う形態をとっており、飲食物の持ち込みも可能という柔軟な運用がなされていた。このカフェの存在が、親子の滞在時間を延ばし、交流の質を高めている。

■ 木工の街の誇りとデジタルを活用した「モッカルーム」 大川家具の技術が息づく木造平屋の館内は、木の香りに満ちている。就学前児の遊び場「モッカルーム」は、平日は入れ替え制、休日は 6 交代制をとるほどの人気を誇り、開館 3 年半で来館 15 万人を突破したという。大川市民にはネット予約の優先権があるなど、定住促進・市民満足度向上への戦略的な配慮も随所に感じられた。

【研修成果】

今回の視察から、本市における今後の子育て支援のあり方として、以下の 3 点を提言したい。

1. 専門職の「顔が見える」連携の仕組みづくり モッカランドのような、保健・福祉・療育が一体となった体制は、保護者の不安を早期に解消する。本市において

も、各専門職が部署の垣根を越え、一つのチームとして機能する拠点機能の強化が必要である。

2. ふるさと納税の戦略的活用とシビックプライド モッカランドの整備にはふるさと納税寄附金が有効に活用されていた。寄附の出口(使い道)を明確にし、市民が「私たちの街の施設」と誇れる空間を作ることは、定住意欲の向上に直結する。
3. 「相談」を「交流」の中に溶け込ませる工夫 窓口に座って待つのではなく、カフェや収穫体験といった「遊び」の中に専門職が寄り添う環境こそが、真に支援が必要な世帯をとりこぼさない鍵となる。子供の成長をともに喜べるご当地キャラクターによる身長パネルも取り入れたい。

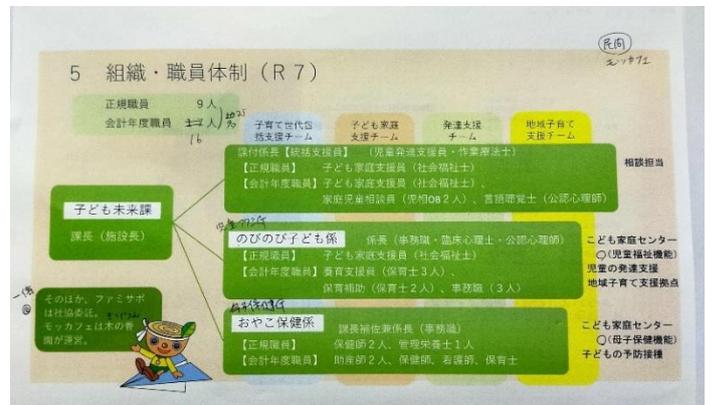
「とにかく子どものために」——大川市の掲げたこのシンプルで、しかし力強い理念を本市の市政にも深く反映させてまいりたい。

モ
ツ
カ
ラ
ン
ド



洋室の相談室、モッカ君、大川組子

組
織
・
運
営
体
制



ミニハローワーク、コワーキングスペース



ク
ツ
キ
ン
グ
ル
ーム

↑
ジ
ャ
ガ
イ
モ
植
え

モ
ツ
カ
ラ
ン
ド
内



和室の相談室、モッカ君身長パネル、ロッカー

伝統産業「大川家具」の産業振興について

【研修・調査内容】

■ **産業振興の司令塔 インテリア課おおかわセールス係の「大川テラツツア」とブランド戦略** 2017年にオープンした「大川テラツツア」は、隣接市の観光客を大川市へ誘致し、もてなすことを目的に整備された拠点である。現存する国内唯一の昇開式可動橋「筑後川昇開橋」のたもとに整備されており、観光協会の事務所も兼ねながら、お土産売り場、カフェ、大川組子をはじめとする木工体験を楽しむことができる。

- **家具コンシェルジュの配置**: 単なる情報発信に留まらず、職人と消費者を繋ぐマッチング機能を担う。家具をはじめとする、市内の観光施設が一目瞭然となる情報発信棚が設けられており、必要な情報を観光客自身がセレクトできる。
- **スピード感ある決断力**: プロポーザル方式でその時々に応じた広告代理店と「大川家具」ロゴマークや「ネコ家具」等のプロモーションを展開する一方で、効果が薄いと判断すれば半年でも運営方法を見直すなど、行政の柔軟かつ迅速な評価体制が敷かれている。
- **ふるさと納税との連動**: 寄附額の7割以上(年度により9割)をインテリア製品が占めており、地場産業の直接的な支援策として機能している。

■ **「バイヤー向け」から「消費者向け(BtoC)」への構造転換** 事業所数や売上額が全盛期の4分の1に減少する中、従来に対業者(BtoB)から、一般消費者が直接技術に触れる産業観光へのシフトを加速させている。

- **体験型コンテンツの整備**: 工場見学や木工体験ができる「マスターーツーリズム」を展開し、消費者のファン化を図っている。
- **家具旅の開発**: 今年度からは「家具旅大川バイヤーズトリップ」という旅行商品を開発し、認知度向上と来場促進を強化している。

■ **次世代へ技術を繋ぐ「木育」とシビックプライド** 伝統を守るだけでなく、子どもたちの心に地場産業への誇りを育む「木育」が戦略的に行われている。

- **職人技への親しみ**: 4月10日(良いドアの日)に合わせた建具職人による修理実演や、梅檀(せんだん)の木の植樹など、幼少期から技術に触れる機会を創出している。
- **創造力の育成**: 小学生の家具デザインを実際に職人が形にする「ドリームファニチャーコンテスト」や、夏休みの木工作品を「木工まつり」で展示するなど、教育と産業が一体となった活動を基本としている。

- シビックプライドの醸成:市役所には大川組子で作られた「筑後川昇開橋」が飾られていた。他にも代表的な物産品をはじめ、キャラクターである「モッカ君」が展示されていた。また、中央公園内のトイレには、大川市出身の音楽家・古賀政男氏の音楽が流れていた。橋の欄干にも彼の代表作とともに音符がデザインされていた。その他、伝統工芸の木工をいかしたバス停の立派な木製ベンチにまで市全体でシビックプライドの醸成への意気込みを感じた。

【研修の成果・今後の取組み】

- 「稼ぐ」ためのコンシェルジュ機能の構築 本市の伝統産業においても、作り手と使い手を繋ぎ、情報発信とマッチングを担う専門人材の配置と点在する観光施設の情報発信機能のブラッシュアップを検討すべきである。
- スピード感を持った事業評価とプロモーション 大川市の「半年でやり方を変える」柔軟性に学び、効果に基づいた迅速な施策の軌道修正を可能にする体制を整えるべきである。
- 「教育×産業」による次世代シビックプライドの醸成 シビックプライドの醸成なくして、シティプロモーションはないと感じた。製品を売るだけでなく、製造工程や職人の技を「教育・観光コンテンツ」化し、子どもたちが地域の産業を誇りに思える仕組みを本市でも推進したい。



昇開橋と大川テラツツア

市役所の大川組子昇開橋

大川家具の情報発信棚

・木工体験(組子)



- ・バス停 木製ベンチ→
- ・橋にデザインされた音符♪→

←市役所のショーケース

- ←市役所のキャラクター
- ←議場にも市章の組子デザイン

